

金氏夫人傳

2016. 1. 10

齋藤美恵子

■作家について

李光洙 (이광수 / 号 춘원春園 / 香山光郎)

平安北道定州郡生まれ

1892年3月4日出生 / 1950年10月25日死亡

1917年 毎日申報 近代長編小説「無情」を連載でデビュー

1919. 東京で2・8独立宣言書を起草。上海へ亡命。臨時政府機関紙「独立新聞」主筆

1922. 総合雑誌「開闢」に民族改造論を發表

1923. 東亜日報入社

1933. 朝鮮日報副社長

1937. 修養同友会事件で投獄

1940. 御用団体の朝鮮分人會會長就任、香山光郎に創氏改名

1949. 反民族行為処罰法により拘束される

1950. 6. 25 朝鮮戦争中に北朝鮮に拉致される

平安北道定州生まれ。崔南善と共に韓国の新文学を開拓した代表的な人物。一進会の奨学生として日本に渡り明治学院で学んだ。帰国後、五山学校で教鞭も執った。初期には「無情」をはじめ、「開拓者」、「尹光浩」などの作品を發表。日本で“2.8 独立宣言”を起草し、上海へ脱出後、安昌浩（独立運動家）の思想に大きく影響を受け帰国。

1930年代初めまで倫理色の濃い「再生」「麻衣太子(마의태자)」、「土」などの長編を執筆。中盤以降は、「異次頓の死(이차돈의사)」「元暁大師(원효대사)」「無明」等仏教色が濃い作品を創作した。1937年修養同友会事件で投獄された。その後、創氏改名し学徒動員の演説をするなど親日運動に本格的に関わっていった。1950年に北朝鮮に拉致された。

《インターネット教保文庫 作家&作品 / 作家紹介から》

■登場人物

金氏夫人：ある商人の4姉妹の3番目。才色兼備。18歳で結婚。

金氏夫人の父：主人公が生まれたときは50歳過ぎ。息子がいないことを憂えている。

金氏夫人の母：息子が欲しいと望み50歳で身ごもるがまた娘を産む。4女の母。

金氏夫人の姉妹：姉二人、妹一人。

金氏夫人の夫：洪氏。材木店を営む。4人の子持ち。金氏夫人より15歳年上。

子ども：先妻の子（結婚したとき、長男15歳。長女12歳。次女8歳。次男3歳）

孫5人。金氏夫人の子（娘2人、息子2人）

■あらすじ

① (P263 上段 1行目 ~ P263 下段 2行目)

金氏夫人は50歳過ぎの商人の父の三女として生まれるが、夫婦は息子を切望していたため祝福されない誕生であった。

② (P263 下段 3 行目～P264 上段最終行)

金氏夫人の父は、息子がいないことから夜遊びを始め他の女性の元に通い始める。

母は、父の浮気を阻止しようと画策するが、思うようにならない。長女も婚家を追い出されてしまい、父の憂いに追い打ちをかけてしまう。母が50歳で身ごもると父は家にいるようになり墓所の手入れをし始めた。また、娘たちも可愛がられ一家は和やかに過ごす。だが、生まれたのがまた娘で母娘とも悲嘆に暮れる。

③ (P264 下段 1 行目～P265 上段 14 行目)

金氏夫人は18歳になり、手相占い師と巫女からの「相手が初婚だと寡婦になる。北方に住む「水」の姓を持つ人と結婚するのがよい」という結果に従い、北に住む先妻の子どもが4人もいる33歳で材木店を営んでいる洪氏の家嫁ぐことになった。このことを金氏夫人は黙って受け入れ嫁いだ。婚家は狭く薄汚かった。そして、15歳の先妻の子どもを筆頭に4人の子どもがいた。継母憎しと拒んでいた先妻の子どもたちなのに金氏夫人はよく世話をした。嫁いだから30年の間に、先妻の4人の子を独り立ちさせ、孫を5人、実の子4人を育てた。

④ (P265 上段 15 行目～P266 下段 16 行目)

世間から「寛大な人」と賞賛されてきた金氏夫人が、苦勞のせいで40歳そこそこで老婆のように老け痩せ細ってしまう。洪氏はそんな妻を労わり実の子だけを連れて新しい家に移り住む。しかし、自分の夢を託していた実の娘が亡くなるというショックで、更に打ちひしがれ精気を無くしてしまう。

⑤ (P265 下段 17 行目～最終行)

娘の死から5、6年後、遅くに産んだ息子と娘が小学生になると金氏夫人に笑顔が戻ってきた。しかし、その幸せも長くは続かず、肺肉腫を患い半年でこの世を去った。病に伏せた半年の間、終始金氏夫人は心を穏やかに過ごしていた。金氏夫人は、亡くなる三日前に病名を告げられるも直ぐに気を取り直す。死ぬ間際まで、夫への感謝と人生への満足感だけを口にしていった。

■感想など

- ・文書の言葉づかいが平易で理解しやすく、また細かい情景描写がなくとも韓国の女性がおかれている社会的状況や登場人物の心情などが上手く表現されていて、当時の様子を窺い知ることができた。
- ・短い文章の中に一人の女性の人生が凝縮されて描かれており、金氏夫人の人となりが見られる。
- ・息子が授けられないだけで辛い思いをした当時の女性たちを思うと理不尽さを感じる。そのような状況でも健気に生きた女性たちのたくましさを感じた。
- ・韓国の人にとって賞賛に値する人間像が描かれている。1940年にこの作品を書いたのは、親日活動家として活動しつつも韓国人の誇りと自負を伝えるために書いたのではないか。